

スカーレット・ウィザード 外伝

茅田砂胡

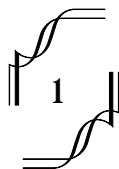
中央公論新社



立ち読み
専用

D 口
T 絵
P

ハ 忍
ン 青
ズ ミ
・ ケ
ミ 龍



昔も今も神様なんてものを信じたことはないが、天使なら信じてもいいかもしれない。

その夜、自分が見たそれは間違いなく『天使』と呼ぶにふさわしいものだったろうと、後々、楽しく思い返したものだ。

しかし、その天使は少々、失敬でもあった。

夜の夜中に突如として、断りもなく、人の部屋に大胆に出現したかと思いきや、発した第一声が、

「ダニエルのお父さん？」

である。

自分は無言の表情だけでそれを肯定したと思う。

息子のダニエルは十四歳、一昨年、連邦宇宙大学付属の中等科に進学した。現在は、経営学部へ進むことを前提とした教育を受けているはずだ。

ダニエルは共和宇宙の経済すべてを支配するとも言われているクーア財閥の四代目の総帥となるべき人間だから、当然、その道を勧めたのだ。

だが、息子はその将来をいやがっていた。

父親の自分に反発しているのも知っていた。

そうしたら、完全防犯設備の施されたクーア財

閥本社の会長室に天使が現れて、言ったのである。

「ダニエルが、自分は会社の経営には向かないから、家出するって。お父さんにそう伝えてくれって」

クーア財閥三代目総帥ケリー・クーアは、片方の眉をちよつと吊り上げた。

目の前に立っている相手は実体ではない。

肉眼で見えているだけでもまるで質感がない。念のために右眼を使って確認すると、案の定、そこには

質量がない。

それでは立体映像だろうと考えるのが妥当だが、この部屋にそんな仕掛けはないし、外部から映像を送ることも不可能だ。科学的な手段を一切使わずに、自分の姿を室内に投影しているわけだ。

普通の人間がこんな現象に遭遇したら、まず首を傾げ、次にどんな仕組みなのかを突き止めようとし、最後に本当に、何の種も仕掛けもないことを知ってパニックを起こしただろうが、ケリーは違った。

こんな芸当ができるものに心当たりがあったので、言ってみた。

「おまえ、ガイアの親戚か？」

映像だけの天使は、心底、驚いた顔になった。

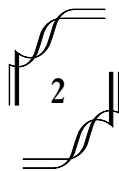
「ガイアを知ってるの？」

「先に俺の質問に答えろ。おまえたちは、人間には、深く関わらないはずじゃなかったのか？」

そうしたら、天使はひどく困ったような顔になり、何やら意味不明の言い訳を残して、現れた時と同じ

ようにいきなり消えてしまった。

ダニエルが学校を飛び出したと連絡があったのは、そのすぐ後のことだった。



映画の撮影に見せかけて巨大要塞を吹き飛ばして、息子を取り戻した方がいいが、その後、クーア夫妻は非常に忙しい日々を送ることになった。

あれだけ派手なことをしてかしたのだから無理もないが、特に総帥のジャスミンは大忙しである。

夜が明けてから明るいうちは連続の会議に会見、書類の決裁、夜には毎日のように重要人物との会食、深夜は深夜で山のような電子書類に眼を通して、せっかく助けた息子も乳母に預けたさきだ。

もともと育児は人任せに言っていたジャスミンである。そのために選ばれた乳母は経験豊富なジャスミンの信頼する女性で、ぬかりなく赤ん坊の世話を務めてくれている。

今のジャスミンの忙しさを目の当たりにすれば、

母親失格だなどという非難をする者はほとんどいなかったが、まったくいなかったわけではない。その忙しさを実感できない人ほど、どんなに忙しくても子どもへの面倒は自分で見るのが母親の義務だろうと主張した。それでも面と向かって文句を言う勇氣はないので、母親とのスキンシップが不足していると、子どもはますます育たないという言い方をしたが、この見当はずれの指摘に対して、ジャスミンは平然と言いつ返した。

「子育てに、これは正しくこれは間違いなんていう方式はない。わたしのやり方が現代の教育の流行に合わないからといって、間違いだと決めつけられる覚えはない。わたしの子どもは至って元気で、健康に育っているんだから。そもそも人間社会には古

来から乳母の風習があるんだ。こんな便利なものを使わないでいる手はない」

実際、この頃のジャスミンにとつて子どもと遊ぶ時間が取れないことよりも、満載のスケジュールをこなすことのほうがよほど重要だったらしい。

副総帥のケリーも忙しさにかわりはなかったが、その忙しさの半分くらいは公にはできない種類のものだった。手伝ってくれた知り合いにあらためて礼を述べて、約束した『報酬』を渡し、連邦軍から極秘に返還されたアレンジ・マシンを引き渡したりせねばならず、しばらくは別行動が続いた。

しかし、ケリーが昔なじみへの義理を果たしても、ジャスミンの仕事はまだ山積みだった。

一日の休みはおろか、一時間の自由もない予定をこなす毎日が何カ月も続いたのである。

副総帥であるケリーは仕事の何割かを引き受けて、手際よく捌いていたが、そのうち、さすがに黙っていられなくなつて、口を出した。

「いくらあんたが頑丈でも、限度つてものがある。いい加減に休みを取れよ」

「そんな暇はない。やることは山積みなんだ」

ジャスミンは例によつて山ほどの電子書類に眼を通しながら、いとも素つ気なく答えた。

だが、ケリーも引き下がらなかった。この頃には、あのとんでもない映画撮影の事後処理も一段落して、後はクアア財閥そのものをどうするかという段階にさしかかっているのを知っていたから、なおさらだ。「あんたはよくても、上が働いてると下も休めないんだ。ちよつとは氣を使つてやれ」

「氣を使うも何も……。一般職員はちゃんと交代で休みを取っているはずだぞ」

「一般職員はな。あんたの傍にいる上級職員は別だ。これじゃブリスをデートに誘う暇もないつて、情報管理長が嘆いてたぜ」

ジャスミンは不思議そうな顔になり、訝しげに言つた。

「プリスはずっと休みを取っていなかったのか？
メルヴィンも？」

「経営者失格だぞ。側近の勤務時間くらい把握しろ。
二人ともずっと働きづめだ。ヘレンもだ」

「ちよっと待て。変だな？ 勤務表では……」

「代替要員に任せても、そいつらじゃあ、あなたの
用事の細かいところまではわからない。結局、呼び
出されるはめになってるんだよ」

「そいつはいけないな。連邦労働基準法違反だ」

「一番、労働基準法に違反しているのはあんただと
思うが、まあ、そういうことだ」

「労働基準法は経営者には適用されないぞ。では、
わたしにはかまわずに休むように言おう」

「それができるならとくにやってるさ。あんたが
休まなきゃだめなんだ」

「と言われても……。わたしの場合は、そう簡単に
身体は空かないんだ」

「休みなんてものは空くのを待ってるもんじゃない。

無理をしてでもひねり出すもんだ。あんたみたいな
激務に就いている人間は特にそうだぜ」

言いながら、ケリーは足にくつついたダニエルを
ポールでも蹴り上げるように足で放り上げて、手で
取り直し、机の向こうの妻に向かって放り投げた。

ジャスミンは椅子に座ったまま、こちらも器用に
片手で子どもを受け止め、足下に放してやった。

宙を飛んだのはほんのちよっとの距離だったから、
子どもは泣き出すこともなく、きゃっきゃと喜んで
いる。放り投げられる感覚が気に入ったらしい。

ジャスミンは靴を脱いだ足先で子どもを転がして
やりながら、夫を見上げて言った。

「わたしはこうやって子どもと遊んでるだけで、
結構、気晴らしになるんだがな」

「おもしろいか？」

「ああ。よく動くもんだと感心する」

近頃のダニエルはすごい勢いで這うようになって
いた。広いオフィスは格好の運動場だ。

ダニエルは現在も乳母の手で育てられているが、ご両親の顔がわからなくなるようでは困るからと、乳母は時々こうしてダニエルを、夫婦が二人きりである時のオフィスに『放す』のである。

こんな無邪気な暴君に仕事場に乱入された場合、両親のほうが振り回されてへとへとになるはずだが、この親子に限って言えば、体力負けするのはいつも赤ん坊のほうだった。

しかし、今のダニエルはお昼寝したばかりだから、非常に元気だった。母親のつま先から逃れて、再び、父親の足下めがけて猛然と這っていった。

もう一度、空中に放り投げてもらいたいらしい。リクエストに応じて、父親が弾力のある赤ん坊の身体を片足ですくい上げて、片手で受け止め、妻に向かつて放り投げる。

と、その時、オフィスの扉が開き、話題の秘書が大変な剣幕で乗り込んできた。

「お二人とも！ またお子さんを投げましたね！」

「投げてないぞ」

ちやうど片手で子どもを受け取ったジャスミンは、真顔で弁解した。

「わたしは受け止めただけだ」

「ジャスミン！」

「大丈夫だ。怪我なんかさせてないから」

実際、子どもはけらけら笑っているが、そういう問題ではない。なのに、父親までが平然と言うのだ。「赤ん坊を片手で掴むのは難しいんだぜ。腕や足を取って胴体を支えなきゃならない。この女はその点上手な捕手だよ」

秘書が本気で爆発する前に、ジャスミンは再び、赤ん坊を足下に放して、言った。

「プリス。わたしは休暇を取ったほうがいいかな」

「はい。ぜひ」

怒りを引っ込めて、プリステインも真顔で答えた。「そのことでしたら、わたしからもお願いしよう」と

思っていたところです。あなたが常人離れして有能なもの、お丈夫なものもわかつていますが、それでもここしばらくは働き過ぎです」

「わたしはいいんだが、おまえたちのデート時間がなくなるのはまずいな」

プリステインが眼を丸くするのを横目で見ながら、ケリーが言った。

「人の心配をしてる場合じゃないぞ。少しは夫婦の時間ってものがあってもいいだろうが」

ジャスミンはきよとした顔になった。

「毎日こうして顔を合わせて話しているのか？」

「ついでにちよつと旅行に行くってのはどうだい？そろそろ、あの酒が飲み頃のはずだぜ」

ジャスミンはますます眼を丸くして、破顔した。

「そういうことならできるだけ早く予定を開ける」

赤ん坊を抱き上げたプリステインが、その言葉を聞き咎めて、心配そうに口を挟んできた。

「お休みになるのは結構なんですが、ご旅行でした

ら、標準時間で五日間以内にお願ひします。それ以上お留守にされると、業務に支障が出ますから」

「休めと言ったり、休むなど言ったり、難しいな」

しかし、クーア財閥の総帥は有言実行の人である。その宣言から十日後には、ジャスミンとケリーはお忍びで惑星ジゴバに降りていた。

クーア財閥総帥夫妻が正規の入国手段を取って宙港に降りるとなると、政府関係者のお出迎えに取り囲まれてしまふのである。

そんな仰々しいのは遠慮したかったので、二人はあくまで極秘に入国したのだ。

この星は観光都市のアシードを中心に、あらゆる娯楽を提供することをモットーとしている。

その娯楽は何も、夜の種類に限ったことではない。温帯の海では海水浴と船遊びができるし、珍しい海洋生物をすぐ傍で眺めるツアーも人気がある。

また高原地帯では、火を使った本物のキャンプができることあって、子ども連れで訪れる人も多い。

都市に位置する仕掛けを凝らした娯楽施設の他に、こうした適度に刺激的な、実は手入れが行き届いた安全な自然が、ジゴバの売り物だった。そういう種類の娯楽はクーア夫妻には向かなかった。

ジャスミンは危険な生き物に出くわしたら、どう倒すかをまず考え、次には食べられるか否かを検討する人間だったし、ケリーも固形燃料など使わずに、その辺の自然材料を使って火を熾し、何日も暮らす野営に慣れている。

従って、『枝を折ると罰せられます』などという注意書きが記されている野営地は、二人にとっては理解に苦しむ代物だった。

それでも、せっかくの休暇だ。二人は相談した末、大型クルーザーを借り、あまり観光客の近寄らない沖へ出ることにした。連日連夜の会合やパーティーが続いていたから、人間のいないところに行きたいという点で意見が一致したし、広々とした自然の中に身を置くのは二人ともきらいではなかったからだ。

ただ一つ、問題は、水着でいると身体のどこにも武器が隠せないということである。二人にとって、これは非常にありがたいことだった。

そこで、借り物のクルーザーにこっそりと物騒な武器弾薬を積み込んで、マリーナを離れた。

今は優れた潜水具があるから、共和宇宙に属する惑星で素潜りなどする必要はどこにもない。あるとしたら、それこそ楽しみのためだ。沖に出た二人は最初は普通に、海中の眺めや水の感触を楽しんでいたが、そのうち、どちらが長く潜っていられるかの競争になった。

ジャスミンは優に六百秒以上は潜っていたが、驚いたことにケリーはそれ以上だった。そうなるとジャスミンも負けじとさらに潜り、潜水時間はどんどん長くなり、最後にはケリーが千秒近くを潜って勝負に決着がついたが、二人ともくたくたになって、かろうじてクルーザーに這い上がった。

「宇宙海賊に、これほど、水泳の心得が、あるとは、

思わなかったな……」

デッキに長々と身体を伸ばして、息を整えながらジャスミンが指摘すると、ケリーも言い返した。

「そう言う、あんたは？」

「訓練の一環だ。ずいぶんやらされた。心肺機能の強化は体力の強化につながるからな」

こちらも息を整えながら、ケリーは苦笑した。

いずこも同じかと思ったのだ。

ウィノアにいた頃、本物の海は一度も見ることがなかったが、水泳——特に潜水は訓練用のプールで散々練習させられた覚えがある。

あの頃は辛くて、いやな訓練でしかなかったが、本物の海で泳ぐのは、それとはまた話が別だった。

いつも同じプールの底とは違って、海底には潜るたびに違う景色が広がっているから、なおさらだ。

自動的に思い出したのはマルゴのことだった。

マルゴは泳ぎが得意だった。泳ぎだけではない、射撃も格闘もケリーより遙かに上だった。

その頃のケリーはほんの少年だったから、年上のマルゴにかなわなくても、ある意味、当たり前だが、それでもおもしろくなかった。

マルゴが好きだったから、おもしろくなかった。

当のマルゴはそんなケリーをよく励ましてくれた。

「あんたは男だもん。今にあたしよりずっと身体も大きくなるし、強くなるよ」

だから、どうにか五分に戦えるようになった頃、礼のつもりで、指輪を買って贈ったことがある。

自分たちは『外』には出られなかったが、居住区内にも商店や娯楽施設の類は存在していた。

それは、後で知った外の世界に比べれば恐ろしく粗末なものだったが、当時の自分の眼には十分に眩しく、華やかに見えた。実戦に出るようになれば、そうした娯楽を味わうための給料も支給された。

マルゴが何を喜ぶのかわからなかったが、年長の女性兵士はよく装飾品を身につけていたから、同じようなものでいいだろうと思ったのだ。

どんな品を選んだかは忘れてしまったが、それを渡した時のマルゴの反応は忘れられない。

きょとんと眼を見張り、ついで、さも馬鹿にしたように言ったものだ。

「うっわ、生意氣。女に指輪贈るなんて十年早いよ。おまけに何これ、ぶかぶかじゃない。サイズも確かめないで、よくこんなもの贈る気になったよね」

さすがに腹を立てて、いらぬなら返せよ、と毒づいて取り返そうとしたら、マルゴは素早くその指輪をしまい込んで、笑いながら舌を出してみせた。

「やだ。絶対返さない。あたしにくれたんでしょ」

そう言うマルゴは嬉しそうだった。頬が上気して、眼がきらきら輝いていた。

わけがわからない。だったら最初から嬉しそうな顔をしろよと怒ったケリーに、隊長のハロルドが、

「あれが女心ってもんなのさ」

と、冷やかすように言ったのを覚えている。

結局、マルゴはケリーの贈ったその指輪に鎖を

通して首から掛けた。戦闘中も、そうでない時も、決して身体から離そうとしなかった。

あの最後の日もそうだった。宿舎に駆け戻って、床に倒れたマルゴを見つけて抱き上げると、首から自分の贈った指輪を通した銀の鎖が流れた。

大声で名前を呼んだ。身体を揺すった。その首に触れると、弱々しい脈拍がかるうじて指に伝わり、そして消えた。

マルゴだけではない。みんな死んでいた。

どこもかしこも、死体で埋め尽くされていた。

ありとあらゆる感情がケリーの身体の中でせめぎ合っていた。身体が爆発するのではないかと思った。

それでも、こんな時でも、兵士として鍛えられ、磨かれた性質は健在だった。

戦場における兵士の心得は敵を倒すことであり、同時に生き延びることである。

危機が迫っていることをケリーは知っていた。

自分は検問所で『外』の奴らを二人殺している。

あの連中と連絡がつかないことに奴らが気づいたら、間違いなく追っ手が掛かる。それだけではない。

この宿舎も含めて、特殊軍兵士の暮らす区域は、軌道上からの監視衛星によって見張られている。

衛星は毎日決まった時間に宿舎の上空を通過する、その時間が迫っていた。

死体しかないはずの宿舎内に動くものの影を捉えられたら、自分が生きていることを『外』の連中に知られたら、もうおしまいだった。逃げ道はない。

奴らは今度はここに爆弾でも落とすだろう。

今、生き延びるために何をしなければならぬか、ケリーは瞬時に判断すると、一か八かの賭に出た。

医務室へ走り、人間を一定時間、仮死状態にする薬剤を取り、自分自身に注入したのである。

衛星の眼をごまかして、生命反応を隠すためには、死体になるしかない。

もちろん、そんな細工をしたところで、普通なら、本当に死んでいるのかどうかを念入りに調べられて、

見破られるだろう。しかし、今の状況なら、周りがこれだけ死体だらけならば、そのうちの一体だけが、実は仮死状態などと気づくはずがない。

しかし、これはひどく危険な、無謀な賭だった。

『外』の連中が、宿舎に転がる死体をどう処理するつもりか、わからないからである。まとめて焼却あるいは溶解処分する気なのだとしたら、それこそ終わりだ。

意識のない状態で殺されてしまうことになるが、今は生命反応を消すことが何より肝心だった。

そして目覚めた時、ケリーは死体の山の上にいた。それはまさに『死体を積み上げた山』だった。

ケリーの下には数十人分の、物言わぬ仲間たちの身体が折り重なっていた。

太陽は大きく傾いている。そこは宿舎から離れた空き地で、『外』の連中が地面に大きな穴を掘っているのが見えた。死体をまとめて投げ込んで、土をかぶせて終わりにする気なのだろう。

運が良かった。積み重ねられた死体の下のほうに置かれていたとしたら、意識を取り戻すこともなく、仲間の重みで圧死していたところだった。

ここまで運ばれる途中、相当、手荒く扱われたと思うのに、右眼の他は身体も痛んでいない。

ほんの少年だったケリーは、殺された仲間たちが自分を守ってくれたのかもしれないとも思った。

近くの死体から使える限りの装備や道具を取り、作業をしていた連中の眼を盗んで、生まれて初めて『外』へ出た。

別人の身分証明書を手に入れて、惑星ウイノアを脱出したのは、それから二カ月後のことだった。

何もかも遠い昔の話だ。

不意に沈黙したケリーを、ジャスミンが見つめているのがわかる。

だが、脳裏をよぎったそれらの記憶を、ケリーはジャスミンに話す気はなかった。

これは自分だけの記憶、自分が覚えていればいい

思い出である。笑って言った。

「長いこと飛んでいると、身体を鍛えるくらいしか、やることがないからな」

これは本当だった。体力の維持は海賊の最低限の義務でもあるのだ。

すると、ジャスミンは疑わしそうな眼で夫を見た。『おまえはちよつと、鍛え過ぎじゃないのか?』

上体を起こしたケリーは呆れた眼でジャスミンを見下ろした。どの口がそういうことを言うのだと、反射的に言いかけたのを抑えて、わざと、にやりと笑ってみせた。

「素直に負けて悔しいって言ったらどうだよ?」

「うん。悔しいな」

こう真面目に頷かれると、拍子抜けする。

この女王はときどき妙なところで、人の気合いを削ぐという特殊技を發揮するのだ。

「軍にいた頃、わたしの訓練成績は記録的に優秀で、勝てる男は一人もいなかった。だからといって別に

得意になってたわけじゃないんだが、何事もこれでいいなんて、現状に満足するのはよくないな」

「おい。頼むからこれから潜水の練習をするなんて言うなよ」

ジャスミンは楽しそうに笑い、腹筋だけで上体を起こした。

いつものことながら、見事な身体だと感心する。

よく鍛えられてはいるが、ボディ・ビルのようにつくられた肉体とは違う。あれは筋肉の一つ一つを際だたせるから、全体的には筋張ったごつごつした感じになるが、この身体は非常に強靱でありながら、なめらかで、はちきれんばかりに豊かだった。それだけの量感を持つているのに、少しも重たげに見えない。充分に引き締まって、しかもしなやかだ。他を圧倒するその肉体に競技用の味気ない水着が、案外、似合っている。

「わたしはもう現役じゃないんだぞ。今さらそんな練習をしても仕方がない。ただ、同じ水準で競える

相手がいるっていうのはいいことだと思ったのさ。どんな勝負でもそうだが、一人だけがぶっちぎりに勝つのはおもしろくない」

「軍にいる時のあんたはまさにそうだったろうに」「おまえもだろう?」

意味がわからずに眼で問い返すと、ジャスミンはそれこそ呆れたように指摘した。

「この共和宇宙のどこに、おまえと肩を並べられる船乗りがいる? トリジウム鉱床を見つけたことも、連邦軍に本腰を入れて追われながら自由の身でいたことも、他の誰にも真似はできない」

「それなら俺一人の手柄^{てがら}ってわけじゃない。半分はダイアンの力だぜ」

「謙遜が過ぎるぞ、海賊。そのダイアナと組んで、本当の意味で飛ばすことができるのはおまえ一人のはずだ。あれを見た時は、さすがにぞつとした」

「リミッターを解除した時のことか」

「ああ。名だたる海賊たちが躍起^{やつき}になっておまえを

欲しがるのも道理だと思った。——その彼らには、また口説かれたりしなかったか？」

「ああ、もう、いやっていうほどな」

ケリーはうんざりした顔で笑ってみせた。

約束の報酬を渡すために昔なじみたちと密かに連絡を取った折、ジャスミンの言うとおり、財閥の副総帥なんかさつさと辞めて宇宙に戻ってこいと執拗に迫られた。

それどころか、副総帥のままでいいからちよっと手伝わないかとまで言われたのである。

しかし、彼らは船を襲って積み荷を奪い、時には人質を取って身代金を要求する由緒正しい海賊だ。

そんな仕事を今のケリーが手伝ったら、とんでもないことになる。

陽が暮れる前に二人は海から上がり、アシードへ出向いて、ちようど行われたパレードを見物した。

このパレードは市が企画する催し物の一つで、華やかな衣裳を纏った男女が激しい音楽に合わせ

て踊りながら行進するといふものだ。

男女とも露出の多い、きわどい衣裳を身につけているから、いつも大勢の見物客が出て大いに盛り上がる。

クーア夫妻もそんな見物客に紛れ込んでいた。

二人とも桁外れの長身だから、いやでも目立ってしまうのだが、髪型と服装をちよつと変えるだけでいつものクーア夫妻とはまったく印象が違って見える。

人々はパレードを見物するのに夢中になっていて、この二人が共和宇宙でもつとも有名な夫婦だとは、誰も気づいていなかった。

夜の訪れた街全体が激しいリズムに揺れている。

華やかに飾り立てた山車が通る。

山車の上にはひときわ美々しい衣裳の女性たちが軽いステップを踏みながら、見物の人々の頭上に、色とりどりの花びらの雨を降らせている。

肉感的な女性たちが見事な肢体を見せつけながら、

情熱的な音楽に合わせて踊りつつ、次々に目の前を通り過ぎていく。

なかなか楽しい眺めだとケリーが思っていると、その横でジャスミンが物騒に笑って言った。

「いい足だ」

この喧噪けんそうの中でそんな眩くらきが聞こえたこと自体不思議だったが、ジャスミンの目線を追ってみると、その先にいるのは男たちの一団だった。

ひとときわ眼を引くのは一団の先頭に立つ褐色かつしよくの肌をした青年だった。腰布一枚という姿で、幟のぼりのような飾りを取り回しながら、若々しくしなやかな筋肉の能力を存分に發揮して踊っている。

「あんた、ああいうのが好きなのか？」

周囲の音楽と歓声に負けじと声を大きくすると、ジャスミンも音量を上げて言い返してきた。

「好みとは違う。いい足をしていると思ったただけだ。」

——おまえのほうがいい足だけだな——
仮にも自分の妻にそんなことを言われたケリーは

思わず笑い出しそうになった。悪戯いたずら気を起こして、問いかけた。

「褒めてくれるのは、足だけかい？」

「背中の線も好きだな」

「それから？」

「肩の筋肉と、手。荒っぽい仕事なのに、指の形が意外にきれいだ」

「他には？」

「あのな、海賊。わたしにばかり言わせるのか？」

「俺はあんたの眼が好きだぜ。時々、金色に光る」

ジャスミンは今は青みがかった灰色の眼を見張みはり、それは自分では見たことがないから、他のところを言ってくれと言った。

女に対する褒め言葉には不自由しないケリーだが、敢えて素っ気ないことを言った。

「その髪は当分、伸ばすのか？」

ジャスミンの髪は肩に掛かるほど長くなっている。燃えるように赤く、ところどころに金の混ざって

いるその毛先をつまんで、ジャスミンは夫に訊いた。
「うるさいかな？」

「いいや、よく似合ってる。赤があんたの色だつて
いうのは納得できるな」

「昔からよくそう言われるんだ。どうしてかな？」

「俺にもはつきりとはわからないんだが、そう思う
多分、あんたの魂がその色をしているんだろうよ」

華やかで、活気があって、何より力に満ちている。
パレードが終わると、二人は町外れの酒場に入り、
念願の赤い酒を注文したのである。

地元でも幻に近い酒なので、酒場の主はちよつと
驚いた様子だったが、すぐに出してくれた。

極上のルビーを溶かしたような色合いをまず眼で
楽しみながら、ジャスミンは酒杯を掲げて言った。

「乾杯しようか」

「何に？」

「今の、この時間に」

「了解」

ゆつくり酒杯を干すと、ジャスミンは満足の息を
洩らした。

「わざわざ呑みに来るだけの価値はある」

「来年もまた来るか？」

ケリーに取っては何気ない台詞だったのだろうが、
ジャスミンは答えなかった。眼を伏せた。

この男はまだ知らない。

自分には来年という時間はない。

医者から宣告されている自分の寿命は三十年。

ガーディアンを破壊し、息子を取り戻してすぐに、

ジャスミンは三十歳の誕生日を迎えた。

だが、これが最後だった。三十一回目の誕生日は
自分には来ないのだ。

ケリーはまだそれを知らない。

あの時——ガーディアンが爆発すると知った時、
話そうかと思ったのだが、無事に助かってしまうと、
面と向かつてはどうにも言いにくかった。

それに、言いにくいことが実はもう一つあった。

自分たちは出会ったその日に婚姻^{こんいん}届を出したが、その時が初対面ではない。

もうずいぶん昔の話だ。あの赤い土^ど壤^{じよう}の惑星で、この男にまだ大勢の仲間がいた頃、自分はこの男に命を救われ、そしてこの男は右眼を失った。

だから、自分はこの男を夫に選んだのだ。決して誰でもよかったわけではない。他の誰にも代わりは利^きかない。この宇宙でたった一人、おまえでなければならなかったのだと言わなければならぬのだが、どう話せばいいものか、判断がつかねた。

この男が彼女のことを——マルゴのことを、まだ忘れていないのだと知った今ではなおさらだった。

あの時、この男が失ったものは右眼だけではない。彼女を、仲間を、祖国を、信じていた戦う理由を、大切だったものすべてを失ったのだ。

この男にとっては思い出したくない、聞きたくもない昔のはずだった。

一方、ケリーも似たようなことを考えていた。

一昨年、このアシードでジャスミンに会った時は初対面だと思った。一度でも会っていれば、こんな強烈な女王さまを忘れるわけがないからだ。

しかし、それは間違いだった。

この女とは前にも会ったことがある。といつても、直接、顔を会わせたわけではない。

自分は三万トン級の船で逃げていた。この女は連邦軍の戦闘機で追ってきていた。あの時は女だとも思わなかったが、決して忘れられない体験だった。

だから自分は、ジャスミンと結婚したのだ。

あの時の操縦者だとわかったから、その桁外れの戦闘能力に、自分をあそこまで追いつめながら引き上げた潔^{いさぎよ}さに、そして何よりジャスミン自身に、間違いなく興味を持ったからだ。

決して、強引な求婚に屈^くしたわけではない。

気が進まないのを無理に抑えたわけでもない。

自分がそうしたかったからだ。

そしてつきあってみれば、この女王さまは豪快^{ごうかい}。

で、物騒で、どんな男より剛胆で、恐ろしく回転の速い、鋭い頭脳を持っていた。正直、感心した。

世間で言うところの『いい女』からはかけ離れているジャスミンだが、ケリーには格好の相手だった。やることなすこと極めつきに非常識なのに、実は公正に徹した考え方も、クーア財閥総帥の名前を最大限に利用しながら寄りかからないしたたかさも、気に入っていた。

いくら宇宙が広いとはいえ、よくまあこんな女がいたと思っただくらいだ。

しかし、ジャスミンはケリーのその心を知らない。あくまで『仕方なく』『契約で』ケリーは結婚に応じたのだと思っている。

その点だけは違うと言わなければならないのだが、自分から切り出すのにも抵抗があった。

あの時——カジノ近くの小惑星帯を逃けている時、ケリーはこの女を振り切ることができず、この女はケリーを仕留めることができなかった。

あんな追撃戦は一生の内、そう何度も経験できるものではない。この女もきつと覚えているだろう。だからこそ、言いにくかった。自分も、この女も、腕に覚えのある宇宙船乗り同士だからこそ、そんな話を持ち出したところで、楽しい話題でないことはわかりきっている。

急ぐことはない。いずれ二人で宇宙に出発したら話そうと思っていた。時間はいくらでもあるからと、ケリーはそう考えていたのである。

「海賊に戻る時はまた、一瓶買っていこうか」

思わず呟くと、ジャスミンは真顔で注意してきた。

「金を出せば買えるつもんじゃないぞ」

「まあな。それはわかってるが、一度宇宙へ出たら、そうちよくちよく呑みには来られんだろう？ 船に常備しておいたほうがいいんじゃないか」

ジャスミンは咄嗟に答えられなかった。

そんな時間は決してこないのがわかっていたから、曖昧に笑って言葉を濁した。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。